

「父なるお方」

ルカ 15 : 11 ~ 24

1 縦軸と横軸

日本基督教団に及川信先生という優れた説教者がいらっしゃいます。及川先生の説教を読んでいると、「人は縦軸と横軸で生きる」というお話が出てきました。前にも説教で紹介したので覚えている方もおられるのではないのでしょうか。縦軸とは神との関係、そして横軸とは自分の周囲の人々との関係。人は神と人との関係で生きていく・・・なるほど、その通りだと思いました。

2 信仰のビフォー・アフター

さて、私は、長い間キリスト教に全く触れずに生きてきました。教会にも行った事はありませんでした。宗教には強い偏見を抱いていました。特にキリスト教は植民地主義を助けていて信用ならない・・・と思い込んでいました。全く縦軸など必要なく生きていけると傲慢にも思っていたのです。無知な自分でしたが、その事に気づきもしなかったのです。

そんな私が実に色々な事があってイエス・キリストと出会いました。40歳で教会の礼拝に初めて出席しました。「イエス・キリストを宣べ伝えなさい」という言葉を与えられて神学校に入学したのが48歳。小倉ナザレン教会に二年間奉仕し、今年度から、この横浜ナザレン教会に遣わされてきました。41歳で洗礼を受けて51歳で牧師となりました。縦軸が与えられて人生が激変しました。

そんな私が伝道礼拝で何のお話が出来んだろう？と悩みました。その結果、信仰が与えられる前と与えられた後では何が変わったか？・・・という事だけはリアルにお話できるかもしれないなあ・・・と思いました。信仰のビフォー・アフターです。

3 横軸だけで生きていく不安

信仰を与えられる前と今では何が一番変わったのでしょうか？
—それは一言で表せば、「安心」を与えられた・・安心して生きていく事を知った、根本的な不安から解放された事が最も変わった事ではないかと思います。

振り返ってみると信仰を与えられる前の私は、「自分はちゃんとした人間でなければならない」・・と考えていました。これは日本社会では一般的な考え方です。自分は強くなくてはならないし、優しくなくてはならないし、勤勉であらねばならないし、優秀であらねばならない、正しくあらねばならない・・と育てられてきましたし、そう思い込んでいました。突き詰めて言えば、「ちゃんとしていない人間は存在価値がない人間」という考えになります。横軸に自分の存在価値を求めるのです。

ですが、思うようには「価値ある人間」になれない自分がいました。弱い自分はひょっとして価値のない人間ではないだろうか？とどこかで無意識のうちに不安に感じていたように思います。不安—それが信仰を与えられる前の自分でした。

しかし、そのような不安は「横軸」がしっかりしている間、周囲の環境が安定している間は大きな問題にはなりませんでした。しかし、横軸はいつも安定しているとは限りません。私の「横軸」が大きく揺らいだのは、30代でした。結婚生活が破たんしました。いろいろな事がありました。私は毎晩「あしたが来なければいいのに・・。眠りから覚めなければいいのに。このまま私かこの人が死んでしまえばいいのに」と思いながら眠りについていました。この一言が当時の私の心理状態を言い表しています。

周囲の人は「もう別れた方がいい」と口をそろえていました。実際、私には滅茶苦茶な事を繰り返す夫と別れない理由は何一つありませんでした。クリスチャンではなかったので神の御前に誓って

結婚したわけでもありません。子どももいない、私自身には生きていくのには十分な収入もある。しかし、不思議な事に何年間も私は別れる事ができませんでした。何故、別れなかったのか？・・・それは、「私が見放せばこの人は生きていけないから」・・・とっていました。

しかし、色々な本を読んだり同じ境遇の友人と話していて、実は全く逆である事に気づかされました。「相手がいなければ生きていけない・・・のは、夫ではなく、自分だ」という事に気づいたのでした。私自身の心の中心に「一人では生きていけない」・・・という不安の塊が横たわっていたのです。どのように歪んだ形であったとしても彼は私を必要としてくれる、誰も自分をかけがえのないものとして必要としてくれない、愛してくれる存在が一人もいない・・・そんな状況よりも、はるかにマシ、誰からも必要とされない孤独には耐えられない・・・と考えている事に気づきました。

「相手が自分を必要としてくれないならば自分に価値がない」と思い込む関係は、健全な愛情のある関係とはいえません。相手を自分の存在価値としてしまうのは不健全です。横軸に縦軸の役割を求める事はできないのです。

4 父なる方との出会い

「自分自身の中にこの状況の原因がある。私が孤独に耐えることさえできれば私はこの苦しみから脱出出来る」と判ったのに、具体的に何をどう考えればよいかは分からずにいました。そんな時に「父なる神」の存在を教会に通っている友人から教えてもらいました。彼女もまた家庭に問題があり教会へと導かれていました。

最初は、99匹の羊をおいて迷い出た一匹の羊を探しに行く羊飼いの話でした。愛の少ない人間、弱い人間、傲慢な人間である私をかけがえのない存在としてわざわざ探しに来てくれる優しい方が

いる、価値のないような小さい存在を限りなく愛し探し求める神がいる・・・その事を知った時、私は、自分は強くなくても賢くなくても愛情深くなくてもよいのだ、こんな私でもありのままで生きていてよいのだ、存在してよいのだ・・・という事を知らされました。どのような私であろうとも愛してくれる存在がいる！新鮮な驚きでした。それがイエス様が「天の父と呼びなさい」と聖書で教えられた方との最初の出会いでした。縦軸との出会いでした。この話を聞いた時から、縦軸を知らずに生きていて私自身の魂の回復が始まったのだと思います。

このように私は人生で大きな挫折、失敗をした者です。成功者が聖書を語るのではありません。砂を噛むような苦い失敗をした者です。しかし、私はこの体験を決して恥じていません。人生の最上の喜びは、イエス・キリストの父なる神の愛を知る喜びだ、縦軸を知る事だ・・・と信仰を与えられた私は断言できます。これに勝る喜びはありません。

3. 放蕩息子のたとえ話

今日の聖書の箇所、ルカによる福音書の放蕩息子の譬え話は父なる神の愛について語っています。有名なお話です。このお話になんの解説も不要でしょう。息子は私たち人間。父親は神をさしています。

11節で弟は財産の生前贈与を要求しています。現代では節税対策に財産を生前贈与する方々もいるようです。しかし、当時の聖書の舞台であるイスラエル社会では、なくなっていない親に対して子どもが財産を要求する事は前代未聞のことでした。非常識な事でした。こういう要求をする時点でこの弟は途方もない放蕩ものです。この要求をのむ時点で途方もなく寛大な父なのです。

しかし、そのように途方もなくわがままな息子。案の定、あっという間に財産を使い果たします。しかも悪い事に飢饉まで起こります。食べるのにも困ってある人のところに身を寄せた・・とあります。羽振りのよかった頃の知り合いでしょうか。ですが、この人は、弟を使用人として豚の世話をさせたのです。ユダヤ人にとって豚は忌むべき動物でした。豚を飼っている事からもこの人はユダヤ人ではありません。が、弟がユダヤ出身である事は知っていた筈です。よりによって本人が忌み嫌う豚の世話をさせました。お金を使い果たした弟を屈辱的な方法でもって辱めました。食事も満足には与えなかったようです。弟はこう言われたに等しいのです。「お前はこの社会では必要のない人間だ。価値のない人間だ」

地にへばりつくような泥にまみれた暮らしです。豚と餌を争うようになった・・という事から分かります。そうやって初めて彼は父親の家を思い出します。「使用人でさえ有り余るほどのパンが与えられた」・・使用人に与えられるパン欲しさにこの息子は父親のもとに戻る決心をするのです。

4. 父なる神の憐みー突き上げてくるような愛

しかし、先に息子を見つけたのは父親でした。父親は遠くから自分の方に戻ってくる息子を見つけると、先ずどうしたでしょうか？この父親は先ず、息子を「憐れ」に思うのです。自分の息子の姿を認めた父親・・この父親が最初に感じたのは、「憐み」であった・・と聖書は語ります。

「憐れに思い」の「憐れ」という単語、原語のギリシャ語の語源は内蔵、はらわた・・と言う意味があります。憐れというのは私たちが使うような「かわいそうに思う」とか「同情する」というよりももっともっと積極的で深く強い意味があります。自分の内臓がよじれるような、自分の体の一部が痛むようなそういう突き上げてく

るような憐み、「ああ、なんという事だ、かわいそうに、かわいそうに」・・・という感情、いえ、慟哭と言った方がふさわしいようなもの。心や精神的なものだけでなく、体の痛みさえ感じる全身をもって感じる憐みです。

父である自分を愛する事もなく、財産だけもらって勝手にふるさとを離れて好き勝手してきた子ども。その子どもを見た時、父親の心の中に溢れたのは、そのような心を振り絞るような憐みの心、体に痛みを感じるような愛であったわけです。

しかし、この父親がこうまでかわいそうに思ったのはなんに対してでしょうか。あちこちが破れている服、豚の糞に汚れた汚れ果てた衣服でしょうか。伸び放題で長い間櫛をいれてもない髪の毛でしょうか。髭もぼうぼうで長い間洗っていない、皮膚か汚れか区別できないような垢にまみれた顔でしょうか。靴もなく裸足のままの埃まみれで傷だらけの足でしょうか。何日もろくに食べていない痩せこけた手足、顔色の悪さでしょうか。そういうものもあったかもしれません。確かにそういうものもあったでしょう。

しかし、息子のそのような姿全体から父親が最も憐れに感じたのは、父と呼び頼りに出来る存在を見失って彷徨っていた姿そのものではないでしょうか。縦軸がなく横軸を求めさまよっていた息子、自分の考えだけで生きてきた、自分の欲望や楽しみだけを追い求めた結果、彼はどう生きるべきかを見失ったのです。自分があるがまま受け入れ、「あなたは尊い」と言ってくれる親なる存在、縦軸をこの息子は見失っていた、この息子は一人ぼっちだった、誰からも必要とされなかった、この息子は本当に孤独だった・・・だからこそ、父親ははらわたがちぎれるほどにかわいそうに、かわいそうに！と思ったのです。

誰からも必要とされない孤独に苦しむ子供の苦しみを自分の苦しみとして憐れんだのです。おそらくすごい悪臭を発している息子

のところに駆け寄り、抱きしめました。「息子よ、私の子よ、よく帰ってきた。私はあなたに会いたかった、あなたの姿が見たかった、あなたの声がききたかった！あなたはひとりぼっちではない、私がいる！」と抱きしめました。

5 悔い改めは父の腕の中で

その父の腕の中で息子は長いあいだ忘れていた安心を感じたのです。そして彼は言います。「わたしは天にもお父さんにも罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格ありません」・ ・ 18 節で父のもとに帰ろうと決心した時、彼は父親のパン目当てで同じセリフを口にします。しかし、22 節での言葉はその時とは違います。もう彼はパン目当てではないのです。

父親がはらわたが千切れるほどに自分を愛してくれているその愛が、父の抱擁から、抱かれる腕のから伝わってくる体温で知ったのです。「私はお前を愛している、お前が私を思い出す前から、私の家を離れていったその時から、ずっとお前が帰ってくるのを待っていた・ ・ 。私はお前を必要としているのだ。ありのままのお前が必要なんだ。」・ ・ そう叫ぶ父の愛を知りました。縦軸を知りました。だから、この息子は、その腕の中で「お父さん、ごめんなさい、あなたを悲しませてごめんなさい」と謝る事が出来るのです。

私たち人間は皆、このように自分を深く抱きとめ、愛してくれる存在が必要です。「私の愛する◎◎よ、私は、ありのままのあなたを必要としている」と呼びかけてくれる存在があって初めて、私たちは自分を愛する事ができるし、他の人を愛する事が出来る存在とされるのです。誰からも必要とされない・ ・ と感じる決定的な孤独から解放されるのです。

幼い頃、子どもの頃は、親がその役割を果たす・ ・ とも言えるでしょう。しかし、親もまた人間である以上、その人の一生の面倒を

見る事はできません。一生の縦軸とはなりえません。また愛する伴侶や子どもなど家族がその役割を果たす・・とも言う方もいるでしょう。しかし、愛する伴侶や子どもと全てを分かち合うわけにはいきません。人間にはどんなに親しくても踏み込めない部分があります。また、同時に死ぬ事もできません。一方的な愛、絶対的な愛を人間から求める事は出来ません。人間の存在根拠を同じ人間から求める事は出来ないのです。横軸を自分の存在根拠にはできない。人間に安心した存在根拠を与えるのは、人間を超える存在だけー縦軸だけなのです。

6 ジョン・ニュートン

実はさきほど一緒に賛美した讃美歌 21 の「くすしきみ恵み」という讃美歌は「アメイジング・グレイス」というタイトルでよく知られています。作詞者のジョン・ニュートンはイギリスの聖職者ですが、信仰を与えられる前は、奴隷船の船長をしていました。

奴隷制というと私たちはすぐにアメリカを思い浮かべます。しかし、実は当時のイギリスこそ、アフリカ大陸から黒人を誘拐して新大陸のアメリカに売るという奴隷貿易で巨万の富を得ていました。多くのイギリス人が奴隷貿易で潤っていました。このアメイジング・グレイスの作詞者ジョン・ニュートンもまた奴隷貿易に携わっていました。

当時の奴隷船では、狭くて暗い船底に鎖につないで何人もの黒人を荷物として積み込む、それこそ満足に食べさせることもトイレに行かせることもせずひどい衛生状態の中動物以下の扱いで「輸送」していたと言われています。多くの黒人が命を落としました。ジョン・ニュートンは多くの人間を動物以下として扱い命を奪っていたのです。

そんな彼が、父なる神と出会い信仰を与えられ心底悔い改めました。奴隷船をおり、苦学して牧師となりました。そして、奴隷反対運動の先駆者となり奴隷反対法に尽力したイギリスの政治家ウィルバーフォース。彼の精神的支柱となったと言われています。

晩年のジョン・ニュートンは若い頃の無理がたったのか、視力を失いました。しかし、彼は讃美歌の中でこう歌っているのです。「I once was lost but now I am found Was blind, but now I see.」一日本語に訳せば、「かつては私は迷っていたが、今は見出された。かつて私は盲目であったが、今、私は見る事が出来る。」物理的な目は見えなくなった、しかし、神に見出された自分は、本当に見るべきものが見えるようになったのだ・・「どのようなあなたでも私は必要とする」という父なる神の愛に見出されて初めて、人間は見るべきものが見えるようになる、生きるべき道が示されるようになる・・それはもうくすしきみ恵みー驚くべき恵みとしかいいようのない父なる神の一方的な愛である、とこの讃美歌は歌っています。人は縦軸に見出された時、自分の中に縦軸が与えられた時こそ、またしっかりとした横軸も据えることができるのです。

7 相模原殺傷事件

相模原殺傷事件から一年が経ちました。人間の仕業とは思えない残虐さです。「精神に障がいを持った人間は社会の役に立たないから殺した方がいい」という主張を、犯人は今も変えてはいないそうです。なんと恐ろしい事件だろうか・・身の毛がよだちます。

しかし、しかし、この「役に立たない命は要らない」という考え方は、私たちの心の中に多かれ少なかれあるものです。「人の役に立つ、社会の役に立つ」というのは横軸の中の評価です。この犯人ほど極端でなくても、私たちの社会はこの「横軸だけ」で動いていると言っても過言ではないのです。

8 教会のつとめ

横軸しか知らない社会で、相模原殺傷事件が起こりました。また他の若者が仲間を殺す事件、また家族どうして殺しあう事件もあとを絶ちません。そのような事件を見ていると、これはこの犯人たちだけの問題だろうか？自分とは無関係だろうか？と思わざるを得ません。私には関係ないとは思えないのです。私自身が何がしかの殺人事件の関係者を知っているというわけではありません。しかし、加害者や被害者、またその親たちが父なる神を知っていたら、教会に通っていたら、このような犯罪は起こらなかったのではないか・・・と思えてならないのです。自分の事をはらわたが痛むまで愛している父なる神という存在を知り、どんな人間であろうと神から愛されている故に尊いのだ・・・いう事を実感している人達の作る社会で育てられていたら、彼らは殺す事も殺される事もせずに済んだのではないか？頻発する未成年の殺人事件は日本のクリスチャンに「もっとしっかり伝道しなさい」と神が訴えているのではないか？・・・そう思えるのです。

彼らに「父よ」と呼べる神の存在を伝える人があったら、人は父なる神の腕に抱きしめられ愛されるために生まれた尊い存在である事を知らせる人があったら、愛されなくてもよい命、虐げられてもよい命など一つもないのだ・・・と告げ知らせる事が出来ていたなら・・・と思わずにはられません。

9 父なる方

自分が誰からも愛されていない存在だ、誰からも必要とされない存在だ・・・という思いは人から生きる力を吸い取ります。キリストの教会は、どんな人間であろうとも「私はあなたを愛する」と言う方を「父なる神」と呼びます。立派な人間、行いの正しい人間だけ

を「わたしの子よ」と呼ぶ神ではありません。豚の糞尿にまみれた汚れた人間をも息子と呼び抱きしめる方を神と呼ぶのです。行いの正しくない者、罪ある者でさえ、父なる神は「我が子よ」と呼ぶのです。はらわたがねじれるような痛みをもって、自分のもとに立ち返るよう呼びかけるのが教会の信じる父なる神であります。

どうしてそう言えるのか？—それは、十字架にかかり苦しんだイエス・キリストによってです。「わたしは罪人を招くためにきた」と断言されたイエス・キリストは、ご自身の手に釘が打ち付けられている時も、「父よ、この人たちをお許してください。この人たちは自分が何をしているか知らないのです」と祈った人です。糞尿にまみれた息子の代わりに自分が糞尿にまみれ汚れる事を厭わないお方がイエス・キリストであり、父なる神を示す存在です。

この父の懷に抱かれてのみ私たちは本当の安心というものを得られるのです。思い出してください、まだ物心つく前のこと、親の腕に抱かれ安心して寝息をたてていた頃を。思い出してください、親の保護を求めて全身で泣いて訴えていた時の事を。人間はいくつになってもどんなに年老いたとしても、どんなに多くの事を経験したとしても、親なるものの存在を離れては安らげない・・「父よ」と呼びかける存在を心のそこから必要としています。縦軸がなければ人間として生きていく事ができない存在なのです。

この父なる神こそ、我々人間の帰るべきふるさとであり、原点であり、揺るがない安らぎを与えるものであります。その事を今朝、皆さんと分かち合えた事を心より感謝し、神を賛美いたします。